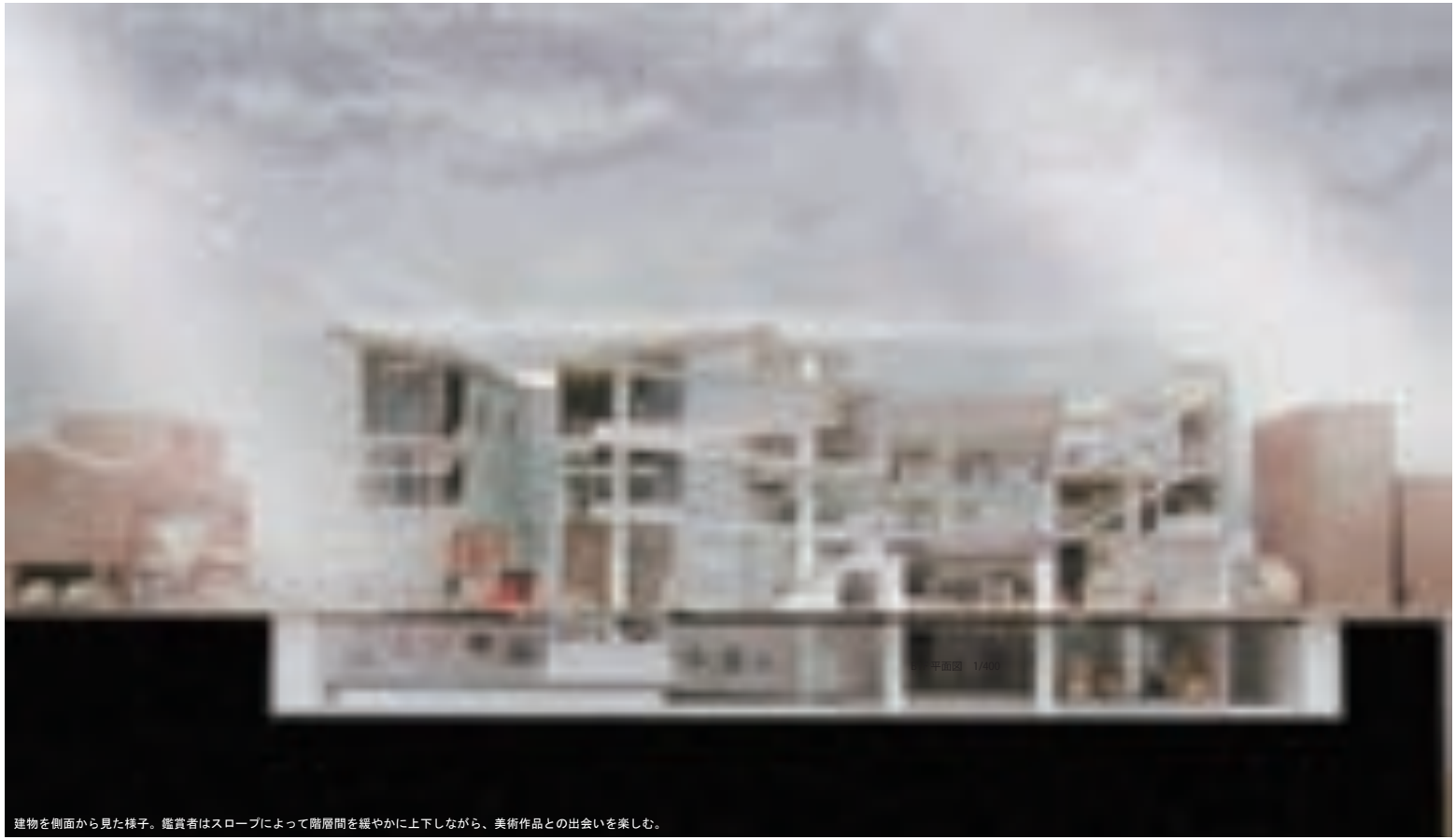
マチ ナカ アート

可動と仮設的要素を用いた地域型展示施設の提案



建物を側面から見た様子。鑑賞者はスロープによって階層間を緩やかに上下しながら、美術作品との出会いを楽しむ。

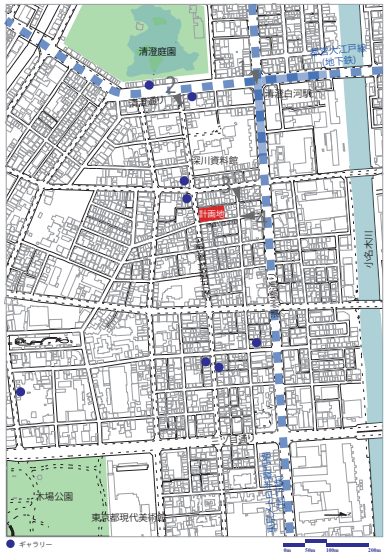
研究内容

近年、若手のアーティストたちが空店舗や空屋を創作や展示の拠点とする試みが、全国各地で起こっている。また町中に作品を散在させるようなアートイベントも開催され、アートに関連する活動が町の中に展開しつつある。しかし、これまでの美術館など一般的な展示施設は、外部空間や町と接続することは少なかった。そこで本計画では地域に展開するアート活動に対応した形式をもつ展示施設を計画し、『アートとマチが連続する』ような設計プロジェクトを展開する。

本研究では近年設計された美術館を調査・分析し、展示室とその他の空間の接続に注目し、作品鑑賞の際に展示室から展示室へと直接移動する「A.A 型」、展示室から展示室の移動の際に展示室以外の空間を経由する「A.B.A 型」に分類した。

設計の計画地は、地下鉄半蔵門線清澄白河駅に近い、深川通り商店街と仲通商店街に面した街区とした。この地域は東京都現代美術館の最寄り駅でもあることから、ギャラリーなどが集まるアートの町として変貌しつつある。ギャラリーと連携したアートイベントなどを想定し、鑑賞者が散在するアートの拠点とマチを交互に体験する行為を、アート拠点をA、マチをBとする、「A.B.A形式」の鑑賞型式と捉えた。計画施設の A,B 空間とマチナカに展開する美術作品や関連施設を連続させることにより、アートとマチとがより密接に関わる空間の使い方や風景を生み出すことを試みた。このことにより、屋内で完結しがちなアートとの新しい遭遇や体験を、建物の外部空間やマチへ展開させることは、この町に成熟しつつあるアートによるコミュニケーションをより豊かなものにすると考える。

設計対象地　清澄白河駅周辺



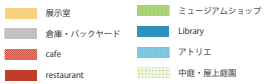
1.

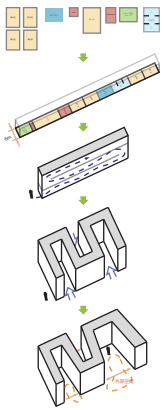
2.

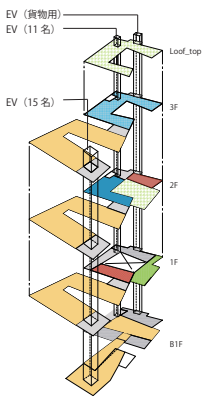
3.

4.

建物構成のダイアグラム




カタチのダイアグラム



プログラムのダイアグラム

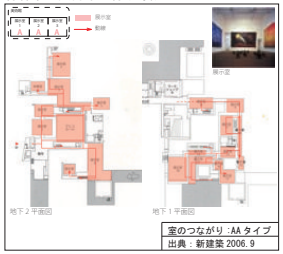
深川資料館通り商店街から建物を見る。コールテン鋼のファサードはマチの新たなランドマークとなる。

大階段は通りの雰囲気を 2 階の中庭に伝える。

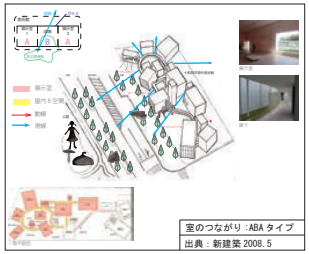
美術館における展示室のつながり
「A.A 型」「A.B.A 型」

青森県立美術館は地下２階、地上２階から構成される。展示室に土壁が用いられるなど斬新なデザインがなされているが、階層間の移動を除けば、展示室から展示室へと直接移動するタイプ (A.A 型) の美術館と言える。一方、十和田市現代美術館は分棟の展示室同士を渡り廊下を経由して移動するタイプ (A.B.A 型) の美術館である。この事例は渡り廊下をガラス張りにする事によって、美術館内部とマチのナカの相互の展示や出来事を視覚的に連続させている。

青森県立美術館：青木淳設計

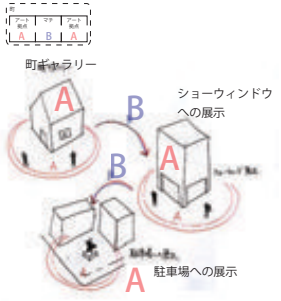


十和田市現代美術館：西沢立衛設計

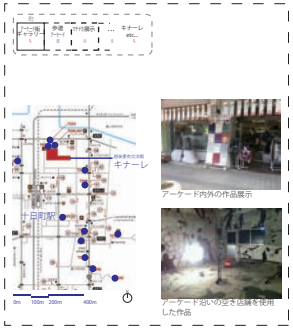


マチナカ展示における「A.B.A 型」

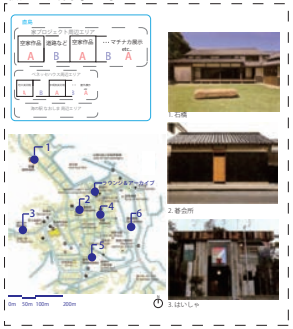
ここでは、再開発や町作りやアートイベントなど、マチナカに展示された作品と町との関係の調査分析を行なった。大地の芸術祭の十日町駅周辺では、商店街の空き店舗を利用したテンポラリーな作品展示の他に、アーケード内外の彫刻作品の恒設展示が、同時進行で行われている。さらに、瀬戸内アートフェスティバルにおける直島では、「家プロジェクト」エリアのように古民家一戸を丸ごと恒設的なアート作品としたり、特定のアーティストの展示施設としている。これらの事例は、鑑賞者がエリアに散在するアートの拠点とマチを交互に体験する事になり、アートの拠点を A、マチを B とする、『A.B.A 形式』の展示空間と捉える事も可能である。

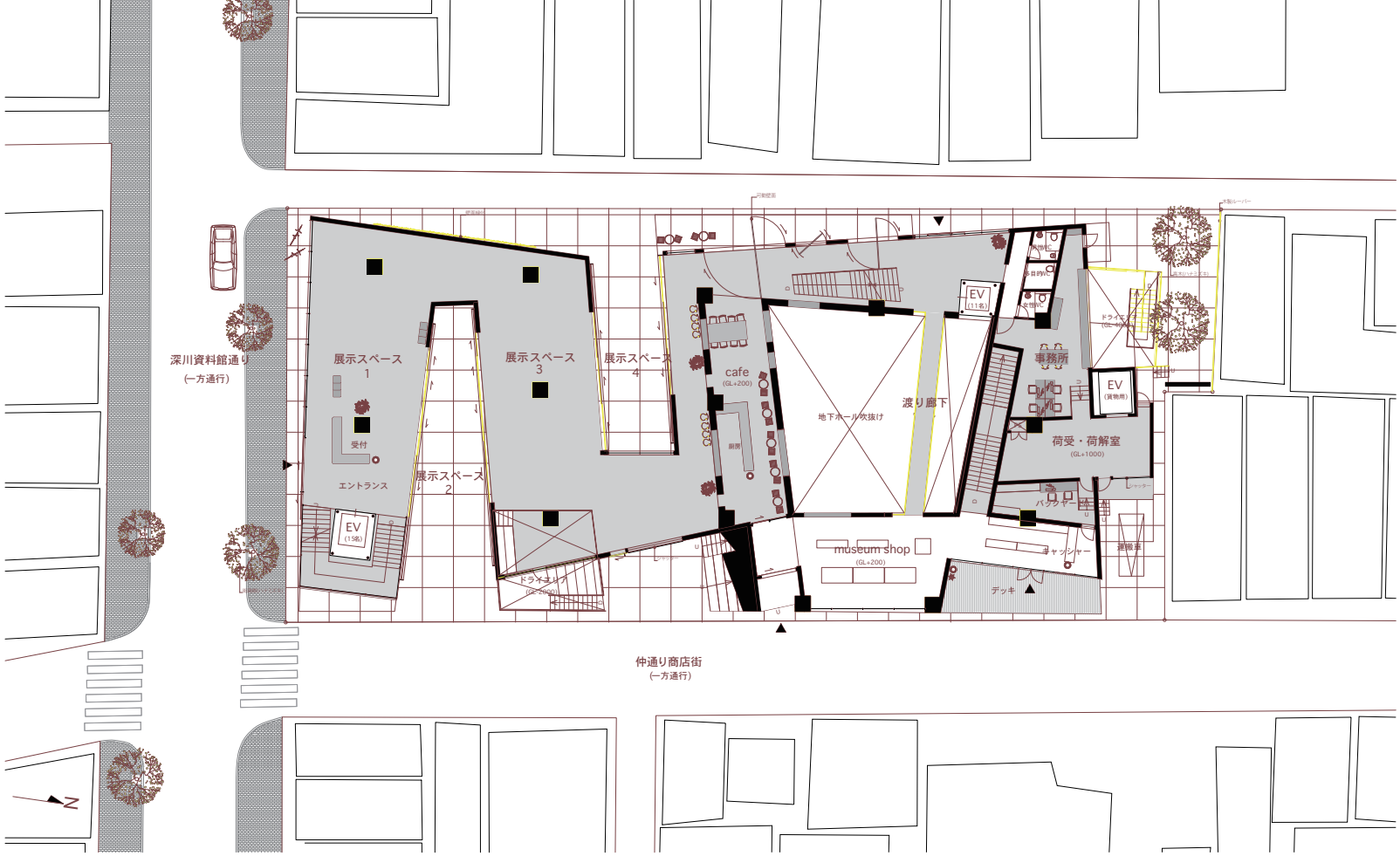


大地の芸術祭　十日町周辺

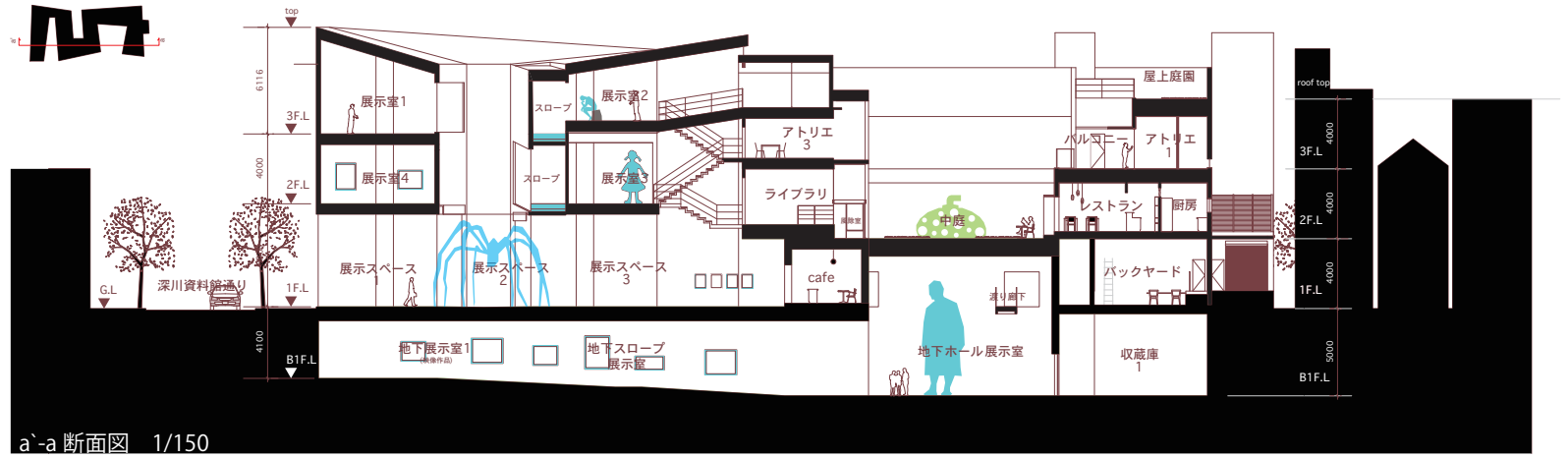


瀬戸内芸術祭　家プロジェクト



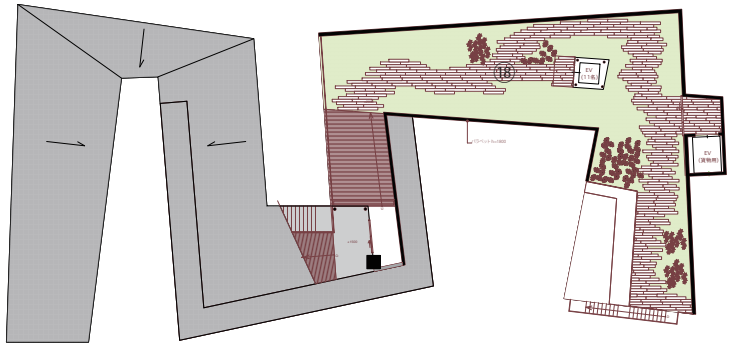


1F 平面図　1/150



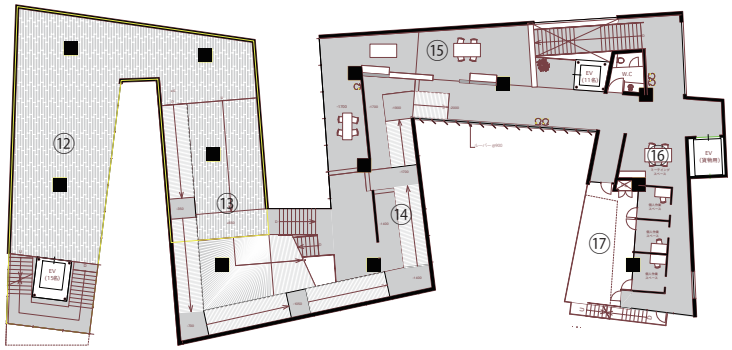
a`-a 断面図　1/150

⑱屋上庭園



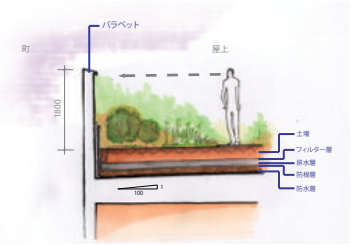
屋上 平面図　1/200

⑫展示室１
⑬展示室２
⑭スロープ展示室
⑮アトリエ１
⑯アトリエ２
⑰バルコニー

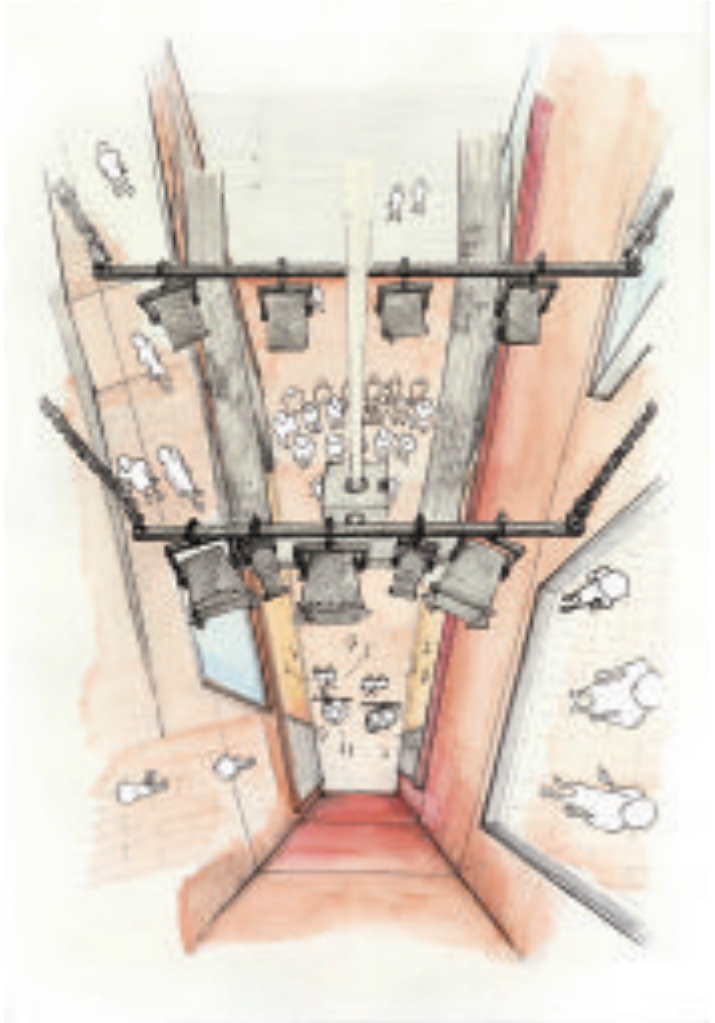


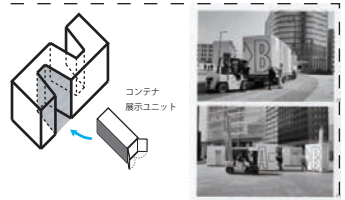
3F 平面図　1/200

屋上庭園の様子



屋上はあえて高めのパラペットを作る事で、町並みへの視線を遮蔽し、心静かに植物と美術作品との出会いを楽しむ場所とした。

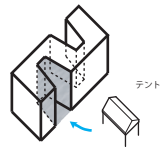




1）ボックス化した展示室をトレーラーに載せ、広場などに展開して利用する展示ユニット。

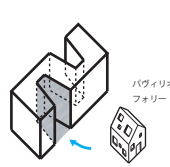
1）出典：「PortableArchitecture」RobertKronenburg 著
2）2011 東京デザイナーズウィーク

2）東京デザイナーズウィークのコンテナ展。



3）アートアクセスあだち「音まち千住の緑」にて 2012. 3 月撮影

3）北千住いろは通り商店街でで行われているアートイベント。

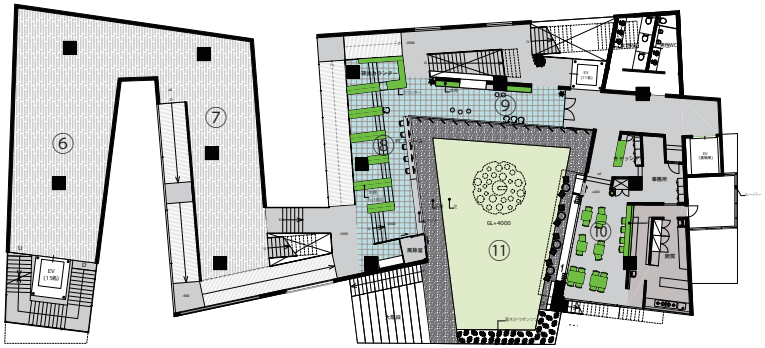


5）

4）東京都現代美術館の前庭に展示されたパヴィリオン。

4）「Cloudscape」作．トランスゾーラー＋近藤哲雄
5）「Bloomberg Pavikion」作．

⑥展示室４
⑦展示室３
⑧ライブラリ
⑨雑誌スペース
⑩レストラン
⑪中庭

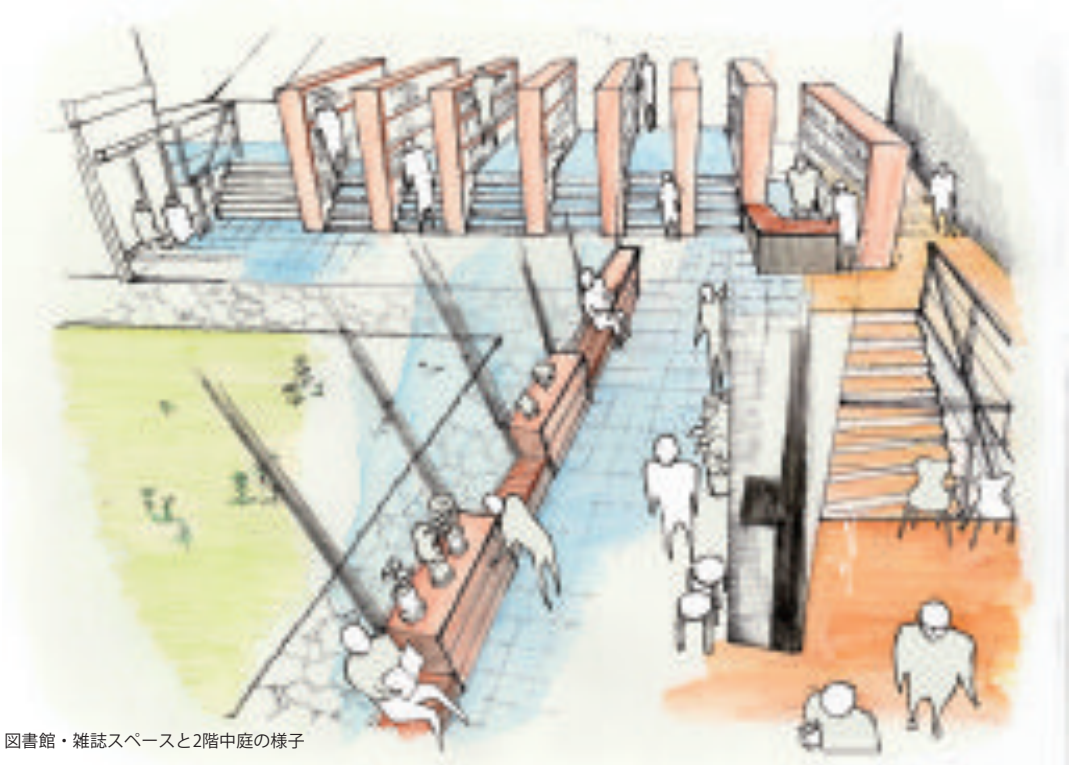


2F 平面図　1/200

B1F 平面図　1/200

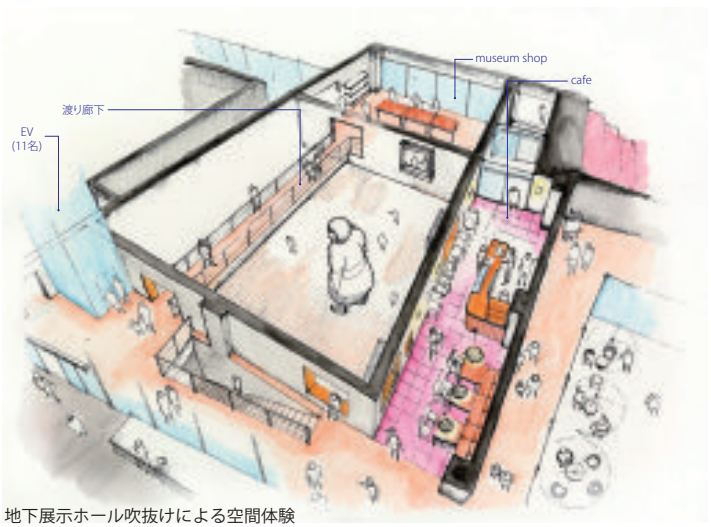
屋外展示スペースの使われ方

折り曲げによって生じた３つの外部空間には立体作品やパビリオンなどが展示されることで、町に開かれたオープンな展示スペースとなり、町の様相や外部の人々を引き込むことを誘発すると共に、上階の開口により建物内と相互に関係するスペースとなる。



図書館・雑誌スペースと2階中庭の様子

２階の中庭はレストラン、ライブラリ、雑誌スペースで囲まれており、雑誌を読む人やレストランで食事をする人、屋外に展示された作品を鑑賞する人など、各プログラムの活動が中庭に展開する事により、施設利用者や地域住民の地域に開かれたコミュニティスペースとなる。



地下展示ホール吹抜けによる空間体験

地下ホールの吹抜けは、ショップ・カフェ・渡り廊下を利用する事により回遊でき、無料ゾーンから地下階の有料ゾーンの展示やパフォーマンスの一部が見えるような構成となり、展示室内の気配を町に伝える。